

76

特245

124

松岡洋祐吉田天風著  
昭和維新の黎明

3

4

2



\*0003141000\*

0003141-000

特245-124

昭和維新の黎明

吉田天風・著

吉田慶三郎

昭和9

ABA

この著作物は、著作権者不明のため、著作  
第67条の規定に基づき、平成12年3月  
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するも

特 245  
124



松岡洋右序 吉田天風著

昭和維新の黎明





風 天 田 吉 者 著

## 序

今や、内外の形勢は愈々重大にして、國家の前途を思へばまことに深憂に堪へないものがある。

一九三五・三六年の危険線を前にして、祖國日本は内外に亘り、建國以來未曾有の一大國難に當面して居る。如何にしてこの國難を克服すべきかといふことは、九千萬國民のすべてが、最も眞劍に考へねばならぬことである。斷して、一黨一派に捉はれたり、或は、階級的立場なごから論議したりな

ごしてはならぬ。

今こそ我等は、建國の詔勅にある八紘一字の大精神をもつて大義を四海に布くといふ熱き信念の下に日本民族本來の使命に向つて、堂々と邁進しなければならぬ。

私は、嘗つて國際聯盟脱退通告後に於ける、わが對外根本方針は「靜觀」の二字に盡くさるべく、脱退外交と靜觀はまさに二者一体、不可分の關係に立つべきものであると、説いたことがある。この靜觀とは、文字に示されてゐる如く、確乎不拔、靜かに列強のなすところ、なさんとするところを凝視

し、徐ろに將來に備へをなすことであり、換言すれば、外に向つては非外交の外交、内にありては民族意識の擴充擴大の謂であつて、これこそは、滿洲事變以來確立された日本帝國の國是であらばならぬ。

本書は、その説くところ、悉く時務の肯綮に當りて余すところがなく、筆者吉田氏の烈々たる經世濟民の眞情は、まことに深き感動を禁じ難いものがある。

初代駐滿大使故武藤信義元帥と、教導團時代同期生であつたといふ吉田氏は、世俗的に言へば、すでに老境の部類に屬

するといつても、敢へて過言ではあるまいと思ふのであるが  
本書中、隨所に躍動する生氣潑瀾たる意氣は、實に感嘆の至  
りである。

氏の如きを指して、まさに永遠の青年といふべきである。

昭和九年六月

松岡洋右

## 自序

集團せる人類の裡に生活しつゝ、ある吾等は明朗なる生活様  
式を展開する上に於て自己を主とすることは罪惡である。之  
れを極論すれば集團生活の上に獨立せる個人は有り得ないこ  
云ふことが正論でもあり實際でもある、即ち自己を抑ゆる所  
に共存共榮の樂地が展開さるゝのであつて謙讓の美德なき所  
に人生の幸福は求められない、即ち個人主義は鬭争を意味し  
物質萬能の思想は人生の崩壞を意味する、即ち歐洲の現在が

個人主義的物質萬能思想の行詰りに相遇し各國競ふて生活様式の變革に銳意せる事實は何んごしても之を否定することは出来ない、我國の如きも維新以來、爲政者が國民の指導原理を誤り歐米物質文化の輸入に專念せし結果、東洋の精神文化は全然地に委し個人主義的物質萬能の弊全社會を風靡し道義頽れて人心紊れ世相日に險惡を呈するに至つた、近時皇道精神を叫ぶの聲都鄙に囂々たるものあるは必竟此の世相に激する反動の響きに外ならぬ、惟ふに將來に於る世界的思潮の流れは眞實の愛に基礎す、精神文化の生活を營む慾求であるふ

ここを疑はない、人力の作爲による美酒佳肴を厭ふて自然の美味を求むることは人生の常情であつて吾等の日に經驗する所ではないか、蓋し宇宙の眞理より發する我皇道精神は將來に於る世界的思潮の根幹をなすものであると同時に、其性命は愈々久ふして益々高きものである、苟も生を斯國に亨け眞理の教養に浴する三千年の歴史を有する吾等は現前せる世界的物心兩面の危機に對して猛然袂を蹴て起たねばならぬ、若し此の好機に會して自奮自勵する所なく全人類の生活に一道の光明すら寄與し能はずせば、是れ天の選民たる資格を擲

つものであつて禍或は内に發する事の不祥なきを保し難い、  
不肖敢て「昭和維新の黎明」を著し我國當面の諸弊を指摘し同  
胞諸君猛省の一助となす次第である

昭和九年六月

## 吉田天風

### 目次

昭和維新の黎明	……………	(一)
華族よ富豪よ	……………	(一一)
東洋方面の軍備	……………	(二四)
危局と我政治家	……………	(三二)
政治機構の改善	……………	(四二)
附記	……………	(五五)
附言	……………	(六一)



## 昭和維新の黎明

(一)

千妖万魔の亂舞したる暗黒の日本は刻々其影を抹殺して過去の夢たらしめ、靈峰富士の頂きには祥雲霞翳昭和維新の陽光將に雄渾なる清彩を放ち來らんとしつゝある、洵に是れ日東帝國を飾る絶大の景觀でなくて何であらふ。

外には多年の追隨外交を清算すべく聯盟會議を脱退して自主獨往の境地を拓き内には頽廢の極にありたる民風を一洗し昭和革新の意氣に燃ゆる新日本將に來らんとしつゝある、恰も是れ炎々たる猛火の埋より晃々夏尙ほ寒き名劍成るの概を示すものではないか、而も此の賀すべく慶すべき興國の機運は果して何れの邊よ

り來れる、曰く

九・一八事件の勃發は即ち是れ

五・一五事件の勃發は即ち是れ

即ち此の二大事件の勃發を契機として帝國の四周を鎖しつゝありたる惡氣流は頓に淨化せられ、鬱勃たる新興の正氣の下に國民の力強き歩調は堂々として大景觀の上に高鳴りつゝある。然り此の壯快なる景象こそ昭和維新の光明を迎ふる前奏曲でなくて何であらふ。

海の彼方には王道政治の大旆を翳して滿州帝國の出現し來るありて凱歌遙かに轟き、内には革新の曙光耀きて皇道謳歌の聲天に冲す、將に是れ昭和維新を象徴する大景觀ではないか。

蓋し此の朗なる前奏曲と雄大なる大景觀は吾等國民が祖先の鴻業に報ゆる感恩報謝の表現であり、未來永劫斯國を護るべき子孫に饒する大和民族としての教訓であらねばならぬ。

惟ふに彼の二大事件の來れる抑も何れより來れる、説くを休めよ、吾等の大和民族の血管に躍れる祖先の大靈が冥々示導する所であつて、斷じて偶然の突發事ではない、彼の滿州の原頭に眠れる我將兵の靈魂と○○○○○○○○○○○と  
は我祖先の大靈と共にあるべき尊き犠牲であつて、慶すべき昭和維新の黎明を迎ゆる祭壇に此の尊き犠牲の供せられつゝあることは、吾等と吾等の子孫が永久に忘れてはならない忠誠義烈の一大痕跡であつて、國家の慶福を謠ふ半面には必ず斷腸の犠牲あることは感銘すべきである。

吾等は此の感銘を新にする機會に於て九・一八事件の真相を想起することが忠死の將兵に對する禮であると信づる。明治維新の元勳西郷先生は遠く明治の初年に於て早く己に滿蒙の將來に着眼し、我帝國は此の性命線を確保することによりて其安泰を期すべしとなし茲に征韓の議となつた、而も其當時の廟堂は維新草創の内治に忙殺せられ事を外に構ゆることを怖れたる結果、百年の大計空しく水泡に歸し可惜千古の英雄をして城山に憤死せしめたることは償ふべからざる國家の大損害であり痛恨事であつて、後年滿蒙の地に拂はれたる犠牲の如何に大なるものなりしかを思はば先生の炯眼誰か之に服せざるものがあるふ、爾來北邊の警報年と共に其繁を加へ應て明治二十七八年の戦役となり、將兵の犠牲となるもの五千戦費一億八千萬圓に達した、而も此の戦役は未だ帝國存立の完璧を致せるもの

にあらず言はば我生命線を確保すべき前衛戦に過ぎないものであつた、即ち此の戦役の終ると共に更に露國の滿州進出となり我國民は臥薪嘗膽更に来るべき試練の前に立つべき準備を收めた、果然、三十七八年の戦役となり兵數の寡と兵器の鈍を以て克く利器を擁する多數の敵を壓倒し去つたのであるが、悲しむべき將兵の犠牲を出すこと五万戦費實に二十億圓を算するに至つた、而も此の二大戦役を経て其得る所は我性命線に對する脅威の一部を除きたるものであつて、之を確保するに至るの道程には尙ほ幾多磐根錯節の横はるものあるを認識すると共に、國民に些の情容なからしむべく之を指導するのが我政治家の任務であつた筈である然るに我政治家の用意茲に及ばず國民と共に二大戦役の勝に酔ひ上下滔々奢侈に走り淫蕩を追ひ大正以後に於ける社會相は言語に絶する醜態を極めたと同時に

滿蒙の地に得たる我權益の如き朝に一壘を失ひ夕に一城を屠らるゝの觀を呈し、數十年に亘れる慘憺たる國民腐心の結晶は馬賊の蹄に蹂躪せらるゝの危機に陥つた、今にして當時の滿州を想起するとき慄然として肌粟を生ずるの思ひがする

明治維新の性命は實に王政復古てふ建國の精神に更生せる一大事實であると共に不世出の英主明治天皇は開國進取の國是を確立あらせられ帝國の今日の隆運を見るに至つた、而も此の刮目すべき大功業の陰には國民の指導を誤りたる政治家によりて幾多弊害の醸成せられたる事實を見逃すことは出来ない、即ち古來より傳統せられたる帝國獨特の醇風良俗は亡びて輕兆浮薄なる歐化の俗をなすに至りしが如き、三千年來長養せられて經國の根幹をなしたる武士道漸く衰へ科學萬能物質崇拜の精神的變化を見るに至りしが如き、人格を尊重して巷閭仰ぎて師とな

し以て處世の範となしたる道德的權威全く地に委し薰蕕を一器に盛るが如き世相を現せしが如き、皆是れ明治維新の齎らせる障害であつて國家經綸の途上に横はれる障害物たることは言ふまでもない、所謂舊道德亡びて新道德未だ興らず舊日本去りて新日本未だ成らざるの感洵に深きものがある。

此の時に當り皇室の信任を忝ふし以て國政變理の重倚に座する政治家は須く宇内の大勢を達觀し大所高所より國家經綸の大策を樹て以て上は皇室の殊遇に酬ひ奉り下は國民の期待に副ふの自信あるべきは勿論である、即ち天下の廣居に於て天下の公事を行ふの心境に於て進んでは國民を指導し退いては己れを律するの忠誠を持すべきである、然るに我政治家の品性は日と共に低下し従つて政治の權威時と共に衰へ思想は混亂し民心は荒廢す、適ま中村少佐の蒙古に虐殺せらるゝあ



危局に注ぐの熱あることなく、單に一二政策の會議討論を事とするが如き吾人は彼等の政治的良心の何れにあるかを疑はざるを得ない、吾人は此際克く灼熱し克く冷却する國民性の短所に向ふて甚深なる考察を注がねばならぬことを痛感する。輿地圖を開きて之に對せよ、我帝國の境域必しも宏大ならざるも而も朝敦輝く東方の首位に座せるではないか、然り此の位置や萬國を朝宗せしむる自然の天啓であつて吾等の衿持は常に茲に存するのである。即ち吾等が昭和維新の黎明に立ち徐に此の天啓を拜するとき雄大の氣宇外に溢るゝものがあるではないか、天地正大の氣宿りて神州の粹となる發しては萬朶の櫻となり凝つては百練の缺となるもの蓋し天與の至寶である。吾等は今此の至寶を捧げて回天の壯途に上らんとするのである。眠れるものは覺むべし、覺むるものは起つべし、正義に固成せる不

斷の彈力もて有ゆる不醇不義を排撃し征服し一天玲瓏の新局面を打開することが吾等の負へる使命であり本領である、空を掩て來る飛機何かあらん海を壓して來る艦艦亦何かあらん、耀々たる天佑は獨り我國民の頭上にある。

## 華族よ富豪よ

(一一)

八紘を統て宇となすとは神武肇國の大詔であつて吾等の大和民族が子々孫々に繼承して須臾も离るべからざる聖訓である。之を仰げば天日の赫々たるが如く崇嚴に俯せば蒼海の洋々たるが如く雄大に、國體の威容燦として輝けるではないか即ち我國民性の胸底深く發しては萬朶の櫻となり凝つては百練の鐵となる特異の

性能あらしむる所以であつて、一脈不斷の天意は皇道と共に万古の大日本史に無限の正氣あらしむるのである。

吾等は爾く崇嚴にして雄大なる宗祖の聖訓を拜し更に明治大帝の御盛徳を仰ぎ以て現在の世相を凝視するとき、冷汗滿肌恐懼措く能はざるの感があるではないか、惟ふに國民の精神的自覺と緊張は潑瀾たる元氣の躍動を致さしむる所以であつて、此の自覺と緊張なき所に偉大なる國家の活動は有り得ない、而も現下の世相を靜觀し來れば社會の表裏に流るゝ總ての氣流が亡國的毒素を多分に含むものであることを否めない、苟も我國民が宗祖の聖訓を體し明治大帝の聖慮に遵ふものならしめば、斷じて現在の如き不義不正放逸淫蕩の社會に安住し得べくもないのである。先づ彼の政界を一晒せよ、請托は殆ど常習の如く公行せられて怪む

ものなく綱紀全く地に委し其甚しきに至りては陛下の勳章を賣買するが如き、百鬼夜行の醜態は我政界に實演せられつゝあるのであつて官場の腐敗言語に絶する彼の宗教家が寡婦に忤れて財貨を奪ひ獸慾に狂ふが如き尋常茶飯事として之を咎むるものなく、教育者が賄賂を貪りて榮進の道を與ふるが如き亦是れ尋常一様の茶飯事として寛假されつゝある。即ち是等國民指導の重要機關が腐敗の極にあることは國家崩壞の先聲をなすものであつて、昭和維新の完成は先づ是等國民指導機關の腐敗に向ふて徹底的革正のメスを加ふることが先決問題であらねばならぬ要するに政治の源泉濁りて百弊之に伴ふて來ることは必然の歸趨である、彼の共產主義者の續出の如き必竟政治の腐敗に寄生せるバチルスに外ならぬ、政界の廓清新に成り道義明かに綱紀張るに至らんか是等の寄生的毒素の死滅去るべきは明

瞭である。今や我國の病毒は中央より地方に及び全國民を擧て醉生夢死の床上に輾轉しつゝあるのである。即ち之が救治の方策は一刻を緩ふすることの出来ない喫緊事であつて曠日彌久手を束ねて之を眺むる如き寛容は斷じて許されない、吾人は茲に於て眞に皇道の體得者として大和民族の使命を解する有爲の士を以てする擧國一致内閣の出現を切望せざるを得ないのである。

然らば大和民族の使命とは何であるか、申すまでもなく宗祖の宣らせられたる八紘を統て宇となすことである、即ち世界人類の總てをして正しく明かなる正義の大道の上に其生を遂げしむることであつて、即ち神の如き慈惠の大道を拓開することが吾等の使命であることは誠に絶大なる名譽であると同時に亦絶大なる任務でなくて何であるふ、思ふに絶大なる名譽は絶大なる任務の遂行によりて求め

得らるゝのであるから、吾等國民は今より將に心機を一轉して忠直豪快の大國民となり以て其使命に邁進すべきである。忠直とは何ぞや、至誠公に奉じ勤儉已れを持することである、申すも畏き極みであるが明治大帝の御座所に敷かれてあつた絨壇が年を経て歴て花模様の手が擦り切れ荒々しき生地が現はれて居たと申すことである、苟くも世界三大強國の一に列する日本帝國の元首として洵に畏れ多き御儉徳であると申さねばならぬ、即ち此の帝徳を以て民を率ひ給ひし結果が大強國中の一國たる國威の顯揚となつたではないか、豪快とは何ぞや、正義を踐て何物をも怖れず光風齊月の心事に於て有ゆる不正を征することである、即ち明治大帝が正義の爲に露の強大に屈せず昂々然として征露の帥を起させ給ひし御英斷の如きを指すのである、由來我大和民族は皇道の精髓を以て外交の根基となし



來りたることは著明なる事實であつて、其文物を輸入するに當りても皇道の上より其是非を検討するを信條とし毅然たる態度を主持して他に降るが如き失体がなかつた。即ち佛教は印度より儒教は支那より共に之を我國に移し皇道の上より咀嚼吟味し終る之を日本化せしめたる事實に徴するも其見識の高邁を遺憾なく物語るものである、然るに明治を経て大正昭和と曆を重ねし近代の傾向は古來の特長たりし自主的經國の觀念慚く亡び、舶來の文物とさへ言へば至善絶美のものなりとする泰西崇拜の弊に墮し、我に同化せしめたる傳統の權威を捨て反つて彼に同化するの醜態が一世の流行となるに至つた、是れ蓋し我爲政者が國民指導の道を誤りたる結果であつて國家の憂患之より大なるはない、近き例を以てすれば今日の家族制度が古來のソレに比して如何に其美質が破壊されつゝあることか、一般

社會の揖睦が亦如何に荒みに荒みつゝあることか、右讀の標識が左讀の標識となるが如き、日本の元号を呼ぶもの稀にして泰西の元号を呼ぶに至りしが如き父母の稱呼がママとなりパパとなりしが如き、皆是れ自主の氣魄喪失を語るものであつて本末を顛倒し日本國民としての本領を没却するものである。吾人は斯の如く滔々として日本帝國の岸を噛むで來れる亡國的頹瀾に對し慨然手に唾して起たねばならぬではないか、若し刻下の世相の如くにして泰西陶酔の俗全國家を覆ひ皇道精神の衰亡日一日其甚しきに至らむか、民力如何に充實するの時ありとするもソハ實に空中の樓閣であつて實質的日本の存在は最早失はれたるものである。彼の五・一五事件に連座せる被告の主張必しも中正ならず其行や極めて危激に過るものではあるが、而も此の亡國的世相を克服すべく敢然一身を君國に捧げて起



指彈せらるゝ醜體之を何とか言はん、或は怖る彼等の放恣淫蕩今日の如くにして底止する所なくんば國家の亂階茲に萌すに至らんことを、昨今宮内省に於て華族の操行を監視する上に多少の嚴格味を加へ來りしことは、其亂行を匡正するに多少の効果はあらふ、只夫れ宮内省が彼等の日常を監視することを餘儀なくさるゝまでに惰落せることは、明かに華族存在の意義を失へることを立證するものであつて其將來や寒心に堪へざるものがある。即ち彼等は此の場合に於て自己存在の意義を明確に認識し以て反省の實を天下に示すでないならば其運命や知るべきのみである。

華族の腐敗墮落今や其極に達するとき華族と共に社會の上層に位置する富豪の行爲や亦言語同斷であつて、其罪彼に軽くして是に重きものがある。吾人は今の

所謂無道にして不遜なる氷の如き富豪に向ふて『汝は速かに誠意の破産者たることを自白せよ』と叫びたい、古來富豪と稱するの徒は概ね貪婪飽くなき守錢奴であつて國家的奉公心に薄く社會的情操に缺るを常とする。只能く集むる私慾のみを知りて能く散する公益を思はず、己れの欲望を充さんが爲には萬金を散じて惜まざるにも拘はらず人の難に赴くが如き良心は寸毫も之を所有しないのが大部分の富豪氣質である、而も斯の如き富豪の多くは己れの所有する此の氣質の爲に身を亡し家を失ふに至るを常態とする、昔は大塩平八郎富豪の冷酷を憤り手痛き一撃を加へ〇〇の青年彼等の搾取飽くなき無道を怒り兇刃を揮ひたることは歴然たる事實である。如今我富豪中の巨頭が時事の非なるに想到し國家社會の事に向ふて少しく財囊の紐を緩めつゝあることは鬼の念佛に類するの感あるも而も其爲さ

ざるに優ること萬々である。吾人は一般の富豪が現下の時局に察し社會相に鑑み  
 須く其盡すべきを盡さんことを勸告する。若し彼等にして此の勸告に聞くの良心  
 なく搾取にのみ就着して暴富を夢むが如きあらば膺懲の天譴必らず來るべきを覺  
 悟せねばならぬ、思へ、物質の富は單なる眼前の幻影に過ぎず心術の富あること  
 によりて子孫永久の繁榮あることを知るべきではないか。

最後に一言する、今の如き精神的に廢頹靡爛せる國民をして精氣潑瀾たる國民  
 に蘇生せしむることは、各階級の指導的立場にある人物の選擇であつて、之を斷  
 行せざる限りは百の訓示も千の法律規則も蓋し徒勞に過ぎない、生ける人間の教  
 化指導は生ける人間によりてなされねばならぬのであつて、單に法律規則の死文  
 字によりて瀕死の國民の回春を期すべしとするが如きは迂愚である、例せば現内

閣の力を注げる選舉法改正の如き其條文が如何に嚴正に如何に細密なるものであ  
 るとしても、此の改正によりて選舉界の廓清は斷じて望まれないことを確信する  
 山中の賊を捕ふることすら容易でない今日ましてや心中の賊を捕ふるに一片の條  
 文を以てせんとするが如きは餘りにも短見ではないか、即ち吾人が國民的自覺を  
 強要する方法として強力なる内閣の出現を疾呼する所以である。只此際一般に唱  
 へらるゝ經濟機構改革の目標たる金融資本の清算と云ふが如き問題は吾人の首肯  
 し能はぬ所である、素より形而下の改革が形而上の改革に伴ふべきものであるこ  
 とは勿論であるが、獨り形而下の改革のみ急ぎて形而上の改革を第二義的の問  
 題なりと爲すが如きは倒行逆施である。吾人は國民の自覺が徹底することにより  
 て形而下の改革が何等の障害なくして實現せらるべきを信するが故に、先づ指導

機關の廓清強化を高潮して止まないものである。

## 東洋方面の軍備

(三一)

今や我帝國は最も痛烈なる試練の壇場に立つものであつて我國民は舉つて蕭然たる自省の人となり以て此の大試練を突破せねばならぬ、即ち外には世界列強の我に對する誤れる認識を是正し修交の軌道を調整する必要あると共に、内には社會全般に亘れる精神的改善を勵行し、旺盛なる士氣を鼓舞して鞏固なる彈力を有する國民たらしめねばならぬ、歐州に於る軍備會議は各國の協調終に成らず各競ふて軍備の充實を期するの現状にあり、米國は其大艦隊を太西洋に移して太平洋

方面の平和に専念せるが如きも彼の尨大なる海軍擴張の手は少しも休止することなく來るべき軍縮會議の危機に備ふる準備に汲々たる有様である。露の日滿兩國に對する非友誼的否挑戰的行動も米艦隊の太西洋歸還と時を同ふして漸時妥協的となれる傾向にあり、而も彼が産業五ヶ年計畫の成功期に到達せんか其動きの那邊に向ふべきやは今より吾人の注視を要する所である。言ふまでもなく吾人が常に大亞細亞主義を提唱して有色民族の同和を強調する所以のものは其端を神武肇國の聖勅に發し爾來三千年大和民族の傳統し來れる不磨の信條である。即ち此の信條あるが故に日章の旗影堂々として世界の上に雄大なる印象を與へつゝあることは吾等唯一の誇りである。然り、日本の歩む大道は宇宙を吞吐する皇道であり其翳せる國旗は正義の標識であつて斯道と斯旗とは實に世界の平和を建立する礎

石たるものである。即ち正義の手によりて不正義の毒手に泣く可憐の民衆を救ひ人類の總てをして至純至愛の生活を営ましむると云ふことが大和民族の肩へる永劫不退の使命である。彼の滿州三千万民衆の爲めに多大の犠牲を辭せず張學良政權を驅逐し王道樂土の滿州帝國を建設せしめたる如き我皇道精神の現はれであると共に大亞細亞主義實行の第一歩である、而も此の正々堂々たる我帝國の民族的運動が動もすれば列國の誤解となり嫉視となり或は經濟的政策により或は武力的手段を以て我進路を沮止するが如き策動あることは寧ろ笑止の限りではないか、特に隣邦支那が此の正しき帝國の眞意を理解せず區々たる感情の末に囚はれて抗日反滿の行動を廢せず、某々國によりて捧げらるる亡國の毒酒に酔ひ排日排滿の舞臺に亂舞せることは彼の爲に悲まざるを得ない、昨今蔣汪の兩巨頭は黃郛氏の

提議を容れ群議を排して日支親善の端を開きつゝあることは時務を知るに賢なりと云ふべく東亞の大局の爲め頗る慶すべきであるが、而も此の妥協的態度が今後ますます親善の度を加ふべきか將た一時の假裝的現象として終るべきか、支那の國情の不安全は吾人をして容易に其豫斷を許さないのみならず彼が米國の援助によりて桑港、布哇、マニラ、グアム、汕頭、泉州、上海、海州、青頭、天津を聯ぬる飛機航空路を設定し、昭和十年末には此航空路に配置せらるゝ飛機千二百台に達すと云ふことである、即ち此の設備は米國の世界一艦隊の完成と相俟ちて吾人に照應の妙を感せしむるものがあるではないか、のみならず、支那の軍隊は着々改善の實を擧ぐることに最善の努力を注ぎ外國武官を聘して策戦に練兵に周到の用意を拂ひ

一、軍事上の要點を奥地に移動し

二、軍制改革を斷行し

三、空軍根據地を海岸線と奥地と二重の設備をする

の大方針を建て其工を急ぎつゝある、尙前記桑港より天津に達する飛機航空路に配置する種類は本年度に於て偵察機五〇驅逐機六〇爆撃機三〇重爆撃機一五であつて、明年度には偵察機一〇〇驅逐機八〇爆撃機五〇重爆撃機三〇、更に明後年度に於て偵察機一八〇驅逐機一二〇爆撃機七五重爆撃機四五總計八百三十五機を配置する筈である、現有飛機三百餘台は今現に該航空線上にありて日々活動しつゝあるのである、惟ふに是等の武力的工作が何を目標とするものなるかは吾等の容易に看取せらるる所であつて天の霖雨せざるに當つて牖戸を綯繆するの一日も

忽緒に附すべからざることを痛感する、然るに我國の先覺者を以て任ずる政治家が舉國一致邦家の事に當るの用意を缺き區々たる政争の末に囚はれ此の重大時局を閑却するの觀あるは何事であるか、隣國支那が大局を見るの明を失ひ、列強の懐柔する所となりて他日の憂患を忘るゝの痴態と其愚何れぞや、要は支那の自覺が平和を招來する楔子たることは勿論であつて議論の餘地なき所であるが、而も我政治家が彼の自覺を促す導師となり至誠と忍耐とによる情誼を盡さねばならぬことも亦勿論である、苟くも皇道の獲持者として將た實行者として人類平和の殿堂を築くべき責任者たるものが區々の私情にのみ没頭して他を顧みざるが如きは寧ろ自己の使命を解せざるものたると同時に我皇道を瀆すものではあるまいか、吾人は支那政治家の無自覺を咎むる以前に於て先づ我政治家の自覺を責めねばな

らぬのである。

吾人は素より兵を好むものではない、東方君子の國を以て任ずる我帝國は正義を尊重し平和を愛好するに於て斷じて他に譲るものではない、論より証據、有史以來我の外に向ふて動ける歩道は盡く正義の大道によるものたりしことは著明なる事實である。即ち正義を行ふもの必ず神佑ある所以であつて帝國今日の、大なる決して偶然ではない、獨り識者の憂ふる所は我國民が帝國今日の隆運を以て單なる戰勝の齋らす所となし、毫も此の戰勝の因て來る所を窮むるなき不用意であつて、現に眼前に迫れる一九三五年の危期をすら平然として之を迎へんとしつゝあるではないか、言ふまでもなく一九三五年は日本が完全に非聯盟員となるの時であると共に第二時海軍々縮會議の開かるゝ時である、即ち此の機會に於て聯盟會

議は必然的に我南洋の統治領につき其返還を主張すべく、我國は之に對して理由なき返還を敢てせざるべきは當然であつて此に日本對聯盟國との對立となるべきは必然である、而も此の對立は米英二大強國が多年企劃せる黄色民族壓迫の最も露骨なる最後の活劇を演じないと誰が保證し得られよふ、英の新嘉坡軍港建設は何を語るか、米の突飛なる海軍擴張は何を語るか、米が露國を承認せると英の對露貿易還元は何を語るか、黒龍江畔に於る露の五ヶ年計畫と稱する武力整備は何を語るか、特に昨今英の我商品に對する峻烈なる門戸閉鎖は何を語るか、吾人は是等の動向を看取し吟味すると共に來るべき聯盟會議の動きと第二次海軍々縮會議の歸趨を豫想するとき血湧き肉躍るの感あるではないか、如何に健忘症の我國民であつても一たび此の形勢を察し更に昭和十一年前後の東洋を想起するならば



手を拱いて晏如たるを得ないであらふ、即ち吾人が重復を厭はず、再三再四此の消息を説きて止まざる所以のものは實に時局の重大を思ふ憂國の至情に外ならぬ

## 危局と我政治家

(四)

昭和維新の黎明を報せし警醒の第一聲が如何に純潔に且つ悲壯なるものであつたか、況んや維新の完成を告ぐるまでには尙ほ絶大なる犠牲の拂はれねばならぬことは言ふまでもない、或は我同胞全部の鮮血の最後の一滴まで此の大試練の祭壇に捧げねばならぬ運命に遭遇するかも知れり難いのである。即ち吾等は此の大試練に向ふて一步は一步と近邁しつゝあるのであつて其準備に細心の計劃を整ふる

と共に、皇道精神を根幹とする剛健なる氣魄を存養し國を擧て正義の爆彈たるべき意氣に燃ゆるの心境を大成せねばならぬ、之が爲には眠れる政治家眠れる宗教家眠れる教育家等は均しく衾を蹴て起つべきである。即ち彼等は其天職の前に全身全靈を捧げ昭和維新の天業を街頭の隨所に疾呼し以て同胞多年の迷夢を破らねばならぬ、即ち非常の時には非常の覺悟を要するのであつて彼の膽甕の如き相模太郎の如き不惜身命の日蓮の如き國家の危機に會して降せる非凡の人でなかつたか、由來我帝國は神人合一の境地に於て固成せられたる國家なるが故に他國人の得て割判すべからざる神秘の存することを忘れてはならない、吾等の同胞が動もすれば奇を好み新を術ふの兒戯に墮し輕佻淺薄なる泰西の學說や妄動を憧憬して之に倣ふものあるは慨すべきである。假令ば彼のマルクスの學說の如き單に經濟

的理論の上のみ執着し人生の總てを唯物化せんとする所に根本的の誤謬がある。凡そ人類生活の要諦は物心兩面の觀念が車の兩輪の如く正しく並行せらるゝ所に存するのであつて、單に其片輪のみを取りて人生の總てを律せんとするが如きは生活の安定を招來する所以の道ではない、蓋し人類の結合は、生産的關係のみによりて成るものではなく生物學の原則たる血族關係が其基本をなすことを思はねばならぬ、即ち生物學的理論よりすれば最も近き血族によりてなる習慣や生活様式等によりて集結せられたる大團體が國家其物であると言ふのである。現に我國の如き神武以降の歴史に見て單なる經濟的生產關係のみによりて成立せるものではないことは明瞭である。勿論三千年の歴史中には種々なる社會的變革ありて大化の革新も莊園制度の推移も封建制度の變遷も、均しく社會の經濟的事情による自

然淘汰の意味も其一部分をなせるには相違ないが、而も是等の變革によりて國體の微動だもすることなく、嚴然存續して今に至りし著明なる事實を何とするか、是れ明かに國家存立の要素が國體に對する種族的信念と經濟的要素を含める政體關係との二者相俟つて其宜しき致せることを証するものである。特に我帝國は宇宙生成の天意に則り一君萬民の傳統を一貫し來つたことは他種族の取りて學ぶことの出来ない靈蹟であつて、彼の共產主義を奉ずる異端の徒が如何なる魔手を以てするも、苟も我固有の正氣存する限り國礎の變革の如き到底企て及ばざる所である。只夫れ當今の有識階級に座する徒にして深く皇道の淵源を窮めず雄大にして宏遠なる八紘を宇となすの心境を理解する能はず、徒らに小我の眼前にのみ囚はれて大我の國を護る所以に眼覺る能はざるは遺憾の極みである。若し彼等の誤

れる心事之を悛むるの良智なしとせば帝國の前路必しも暗礁なしと誰か之を保証すべき、最も近き一例を擧て之を語らんか、滿州國民が我が國民に對し果して如何なる感情を持つて居るであらふか、吾人は遺憾ながら心からなる親しみを持つていないと言ふに憚らない、素より滿州國人としては新なる勢力によりて多年の桎梏より救はれたる感激の絶無であるとは言はないであらふ、而も其半面には我國民が其優越を鼻に懸け事毎に彼等を眼下に見るの振舞あるを憎惡し憤激しつゝある。即ち面従して背反すると言ふのが偽らざる滿州國民の心理状態であると信する、筆者は昨年親しく滿州各地を訪問して得たる感想であつて我國民の深く省察すべき所ではないか、夫れ皇道は至純至愛の天意に發する大義名分の上に住するのであるから徳を尊び智を磨き以て天意を瀆することを怖れねばならぬ、而も如

今國民指導の天職にある輩が只智を重じて徳の更に重すべきを知らざるが如きは愚の極と言ふべく、至仁至愛の心境に於て友國を扶け彼此相結びて東洋平和の基礎を確立することが國民一致の願望であらねばならぬ、即ち此の願望を大成すべく最善の努力を致すことが我政治家の唯一の任務ではないか、而も我政治家が大所高所よりする經國の眞諦に觸るゝなく區々たる眼前の問題に專念して他を顧るの餘裕なきは何と云ふ醜態であらふか。

吾人は素より政黨政治を忌避し憎惡するものではない、否、公正にして純潔なる人々によりて行はるゝ憲法政治は皇道の上より認識せらるべき政治形式である去ればこそ明治大帝は憲法を煥發せられ議院政治を布かせられたる次第であつて他國の議院政治に倣はれたるものでは斷じてない、若し日本の憲法政治を以て例

を外國に取れるものなりとなし施政の精神も亦之を外國に學ぶべしとする論者あらば、嘗に明治大帝の聖旨に反逆する不逞の國賊たるのみならず、日本意識を没却せる賣國奴でなくて何であるふ、吾人は過去に遡りて議會中心主義を公唱したる賣國奴的政黨の非違を追窮することを隱忍するが、要するに今の政黨なるものは之を公黨として遇するには餘りに不徳不義であり不純無智であつて朋黨の域を脱しない集團たるに過ぎない、即ち既成政黨なるものは明治大帝の聖旨に忠誠を缺き徒らに朋黨比周の邪道に墮し黨利黨益の爲に國光を傷け國民を毒せるものであつて、一日も其存在を許さるべきものでない、彼等は五・一五事件によりて政治の淨化が叫ばるゝや暫く其魔手を收め聲を潜めたのであつたが、第六十五議會の開會せらるゝや彼等は毫も舊惡を省みるの誠意なく往々軍部に對して批難の矢

を放てるが如き何等の厚顔であるふか、軍人の忠誠と眞面目に對する彼等の不忠誠と不眞面目を以てして逆に軍部を批難するが如き不遜も亦甚しと言ふべく、所謂傑狗の堯民に吠ゆるものであつて天下の清議は斷じて彼等に與するものではない、論より証據、政黨の更生を叫ばれたる本期議會に於てすら政黨政治家の不正不義は遺憾なく白日の下に曝露せられ其信用は更に轉落したではないか、而も彼等は退いて自己の非を責るの良心なく面を拭ふて街頭に憲政の擁護を説く、聞くもの誰か啞然たらざらんや、若し此の厚顔と無耻とを以てして尙ほ經國を談じ濟民を説くべしとせば、天下の事其總てが兒戯であると言はねばならぬ、吾人は政治遊戯に耽ることのみを知りて其他を知ることなき政黨政治家に此の重大なる時局に當面せる祖國を托するの危険なることを痛感するが故に、現内閣に代りて來

るべき内閣は眞に救國の抱負を有する勇斷果決の強力内閣たらざるべからざることを絶叫すると同時に、既成政黨に向ふては此際潔く罪を天下に謝し其黨を解消して政界より引退することがせめてもの罪亡しであることを忠告する、惟ふに時の爲政者に嚴肅なる大義名分の觀念あるなく勤直清廉の心事あるなくんば何を以て國家の綱紀を匡し國民指導の重責を果すを得んや、徒に俗淪に迎合することにのみ没頭して正論民を率ゆる所以を知らず、羊頭を懸ること多くして而も狗肉をすら估ること稀なる彼等を目して不渡手形の濫發者と云ふ穿ち得て頗る妙ではないか、必竟斯の如き熱烈なる誠意を缺く形式政治貪汚飽くなき私腹政治が國民に對して何等の權威なきは當然であつて、下剋上の氣風刻々社會の各層に彌漫し綱紀弛廢し民風腐敗するに至れる其罪果して誰の負ふべき所ぞ、今や我國民は空前

の危局に當面して熱誠なる國士の登場を祈り眞劍にして且つ彈力に富む政治の實現を待望して止まないものである。政黨の聯繫も無意味である、政策の協定も寧ろ滑稽である。況んや政黨内閣への還元の如き國家を玩具視するものであつて、其不可なることを言を待たない、詮し來れば國民指導の責任ある階級の總てが腐爛し盡せる現狀を打開する方法としては、從來の如き職業的の政治家や宗教家や教育家を根本的に淘汰し、眞に此國を托するに足るべき清廉剛直の士を擧げ以て精神的更始一新を斷行すべきである、之が爲には政黨政治に代ゆるに暫時の軍權政治を以てするも敢て不可なることなく、國民の期待も亦茲に、存することを疑はない。

## 政治機構の改善

(五)

極天極地吾等は日本の臣民として日本の國土に生を享けたる天の選民なることを誇ると共に、吾等日本臣民に與へられたる世界的經綸の使命が如何に尊く如何に重大なるかを思ふて肅然たらざるを得ない、吾等の前程は極めて遼遠である、吾等の占むべき地歩は頗る雄大である、世界の思潮が何れに流れ如何に濁るも日本の思潮は超然として衆愚の圏外に屹立すべく以て彼等を指導する所に日本國民の本領を存する、徒らに屑々たる眼前の小事小故に囚はれて吾等の本領を遺忘するが如きことあらんか、是れ實に喬木を去りて幽谷に移るものであつて天の選民

たる尊き階段を降りて衆愚の群に投ずるものである。若し我國民にして爾く品性の墮落する時あらんか其時は即ち精神的に日本の亡びつゝあるの時なることを牢记せねばならぬ。

蓋し神ながらの道は人類生活の上に輝く最高の指針であつて此の至貴至重の指針が獨り我國民の享受する所となりて今に及べることは偉大なる奇蹟でなくて何であるふ、即ち此の奇蹟に生活する日本國民こそ天の選民であつて正しき仁正しき智正しき勇に終始することが吾等の信念であらねばならぬ、彼の輕佻なる西説に酔ひ浮華なる西情に溺るゝが如きは天恵に對する反逆者となすべく、亦彼の漁利の徒が國家の根底に思を致すの良心を失ひ日本國民としての權威を擲ちて顧みざるが如き亦是れ天恵に對する反逆者に外ならぬ、且つ夫れ法制の革新の如き制

度の改善の如き均しく國家の組織に伴ふ形式的條件であつて、國家經綸の大綱と精神は此の形式以外のものであることは言ふまでもない、而も多くの政治家が此の根本觀念を失ひ單に形式の末にのみ走りて政治の精神を逸せることは由々しき國家の大患である。如今我國の總てに亘りて其形式的組織は略々完全に近きものであることは外間の認むる所である。而も此の形式の安全を致さんが爲の代償として我建國の基礎を破壊して悔ゆるなきが如き洵に愚の骨頂ではないか、凡そ國家の盛衰興亡は國民道德の振否と思想の統一せらるゝと否とにある、若し國民の思想統一せずして多伎に分れ國民の道德廢頽して風教亂れんか、何を以て文化の成績を擧げ以て國民の幸福を増進すべき、即ち政治の不振となり外交の萎縮となり社會の弊風滋く個人の亂行甚しきに至る。之を例せば滿州事變の直前に於る我

内治外交と一般の世相に想到せば思ひ半ばに過るであらふ、政黨の首領や財閥の巨頭が憂國志士の手に斃れたることは吾人の痛惜して止まざる所ではあるが、餘りにも甚しき政黨と財閥の横行放恣其因をなせるものなることを思ふとき、吾人は天譴の如何に峻烈なるかを怖るゝものである。多年長夜の眠にありたる我國民は此峻烈なる天譴に相遇して其半眼を開いたかに思はれたのであつたが、滿州帝國の順潮なる發達を望みて緊張の氣弛みて睡魔瀕りに夢境に誘ふの狀あることは國家のため痛恨に堪へざる所である。滿州國が慚を以て獨立國家の工作に成功し康徳皇帝の即位あらせられたるの故を以て非常時局の解消を叫ぶものあるが如きは寧ろ論外である。惟ふに我國の非常時局は今後益々其重大性を加へ來るのであつて國防的にも經濟的にも幾多の試練に逢着すべきは必然である、吾等國民は更

に覺悟を新にし政府を督勵し鞭撻し以て皇道宣布の大目的に邁進することが刻下に於る吾等の動向であらねばならぬ、而も我國民の用意茲に及ばず非常時を叫ぶの聲をすら勉めて之を避るの風あることは何としても遺憾の限りではないか、『憂きことの尙此の上に積れかし限りある身の力ためさん』の古歌が我等日本國民特有の意氣ではないか、區々たる眼前の小康に戀々して八紘統一の本願を捨る如きは斷じて日本男兒の眞骨頭を具へたるものではない、一難を経るごとに勇氣百倍し來り恰も天斧巨巖を劈くが如き威力を全人類に示すことによりて吾等が天孫民族たるの誇りを如實たらしめ得るのである。只夫れ現在の同胞の多くは小智の口に甘きをのみ知りて大智の世を救ふ所以を知らない、故に吾人は先づ強き政局を打開し國の力を以て國民の總てを自覺せしむべく政治機構の改造を斷行すべく主

張する。即ち我國體の尊嚴に對する認識を普遍ならしめ天皇即日本の信念の下に思想の統一を完成することは一刻も緩ふすべからざる焦眉の急務であるからである。彼の共產主義の如き根本に於て我國體と相容れざる異端の徒は勿論、均しく國家主義を唱ふるの學徒にして尙ほ且つ天皇を政治の機關なりと誣ゆるものあるが如き斷じて恕すべきではない、斯の如きは國體と政體とを混同して我皇室を輕じ奉り我憲法を蔑視するものであつて、其罪や實に共產主義を唱ふるものと同架に置くべきであつて、我國土に其存在を許さるべきではない、蓋し斯の如き思想の混亂によりて誘起し來れる弊害は綱紀の弛廢となり風教の壞亂となるのであつて、憂國の志士によりて叫ばるゝ歐化亡國論は國民の總てが襟を正して傾聽すべき救國の獅々吼でなくて何であるふ、而も我國民は未だ歐化の夢末だ全く醒めず



此の大獅々吼を傾聽するの誠意なきのみか、身命を邦家に捧げて敢行したる憂國の犠牲に對してすら單に刹那の感激を以て清算するの傾向があるではないか、更に痛憤すべきは官場の巨頭が破廉耻の罪名によりて拘禁せらるゝものゝ多き、其醜態言語に絶するではないか、嗚呼舉世滔々として國家的良心を失ひ奸黠相結び辨佞相倚り國礎の動搖を意とするなく日夜利に走りて飽く所なき昨今の風潮抑是を如何せん齋藤内閣が綱紀の肅正を以て人心の一新を期すべく其任務に就きしより二周年、而も其主張の實毫も擧らざるのみか閣内より多くの綱紀破壊者を出せることは何と言ふ皮肉さであらふか、齋藤首相のねばり強さを以てしても將また西園寺公其他重臣の支持を以てしても晏如として其地位に居られぬ筈である。若し彼にして尙ほ此の重大なる責任を解せず一日の延命を策するが如きことあらん

か、悪化せる我思想界は一層の混亂を招き人心の頹廢に更に猛烈なる拍車を加ふるに至るべきは明かである。吾人は齋藤首相の忠誠を信じ其總辭職が單に時間の問題たるべきを疑はないと同時に、之に代りて來るべき内閣が眞に時局の重大性を認識し且つ國民の精神的自覺を促すに銳意すべき忠直剛毅の内閣たらんことを祈らざるを得ない。即ち吾人の主張する強力内閣の出現すべきは實に此の時であつて政黨内閣への還元の如き國民の擧て排撃する所である。若し夫れ政治機構の改造に關する吾人の希望に至つては他日更に詳論する所あるべきも、政局異變の必然的なる今に於て其概要を述べ一般大衆の批判を煩すことが極めて必要であると考へる。即ち其一は文部省を廢して新に文教院を置き宗教教育に關する大綱を樹て内閣の圏外にありて其統制に任ずる事である。其二は内閣の圏外に監察院を

設け公的機關の全面に對し嚴格なる監察を行はしむる事である。蓋し此の二院の特置は現下に於る宗教教育の墮落を匡正し且つ一般官場の綱紀を肅正するを主眼とし、更に諸種の弊害を生む出版物等に對し特に精密なる調査と適正なる制裁を加ふるを目的とする、要するに帝國興敗の伎るゝ危局に當面して國民の情容を一新せんとせば、勢ひ國の力によりて其自覺を強要するの政策によらねばならぬ。即ち吾人が如上の二院を急設すべく強調する所以であつて苟くも現下の危局と世相に對し眞劍なる檢討をなしつゝある識者は必ず吾人の所説に共鳴すべきを疑はない。

今や世界は物質文明による一方的偏重生活の行詰りに相遇し極度の懊惱に呻吟しつゝあるのであつて、今後の國民生活を如何に指導すべきかと言ふ、最も難解

の宿題が各國政治家に課せられているのである。怖らく日本の政治家も此の課題に對して慘憺たる苦心を重ねつゝあるべきを思はしむるのであるが、吾人の信ずる所を以てすれば我皇道精神の振作擴充が此の重大なる課題を解決する唯一の鍵なることを強調する、單に物質を主體とする生存競争は下凡の鬭争であつて耀々たる光明もなければ、崇高にして雄大なる性命もない、槿花一朝の榮はあろふが悠久を誇る常盤木の情操がない、我皇道の精髓は三種の神器によりて象徴せらるゝが如く至智至仁至勇であつて、我國民精神は實に此三德によりて蘊釀せられ陶冶せられたるものであらねばならぬ、故を以て我國民には物質至上主義以外更に偉大にして崇高なる精神文化の權威を賦するのである即ち此の信念によりて人事を律し國事を律することが吾等の特質であつて大和民族てふ衿持の存する所であ

る、苟も國民指導の任にある政治家が其根本原理を茲に仰ぎ誠心誠意事に當らんか、之を經濟方面より見て彼の關稅障壁を高ふして我貿易を拒否せんとする政策の如き毫も怖るゝに足らない、之を國防方面より見て列國の軍備に汲々たる亦更に怖るゝに足らない、要するに國民の歐化思想を是正して本來の日本思想に復活せしむることが焦眉の急務であつて、當面せる國難打開の道も之を措いて求むることは出來ない。

吾人は素より世界的平和の來らんことを衷心より希望するが故に國際的親善を害するが如き行爲に對しては斷じて之を容認するものではない、然り而して世界的平和を確立する基礎工作は種族團結を單位とすべきであることが自然的合法の工作である事を疑はない、既往より現在に亘つて米國の採れるモンロー主義が如

何に南北亞米利加の平和に貢献したるかを見よ、吾人が大亞細亞主義を強調し東洋平和の工作に邁進せんとするもの蓋し自然の法則に適順して世界的の平和建設に精進せんとする階梯たるに外ならぬ。若し同一種族間に反目あり鬭争ありとするならば、世界的平和の如き百年河清を待つ類ではないか、即ち遠きに行くに必ず遲きよりするのが自然の天則であつて之を否むものは天則に對する理解力なきものか、然らずんば惡むべき慾望を遂げんとする野心の群かである。然り、怖るべきは此の無理解なる野心群であつて、之あるが爲に吾等東洋民族は奈何に大なる悲むべき犠牲と勞力を拂ひ來つたか、否、吾等は近き將來に於てヨリ大なる犠牲と勞力を拂はねばならぬと云ふことが東洋民族就中日本國民の頭上に運命づけられつゝあるのであつて、寸時の倫安だに許されないのである。惟ふに現下の

日本は大和民族の嘗めたる過去幾十年の忍苦を清算し皇道爲本の東洋文化により人類救治の本願を達成せんとする首途の日本であることを自覺するならば、大國難の到來に對して多大の感激と愉悅に充ちたる勇氣を以て之を迎ふべきではないか、吉田松陰先生壁間に題して曰く『松下雖陋村誓爲神國幹』と、此の意氣ありて始めて明治維新の功業は大成せられたのである。此時此際吾等の同胞は將に先生の意氣を襲ぎ日本小なりと雖も以て宇宙の幹たらんの氣魄に甦るべきである。要するに吾人の求むる所は政治の精神形式二ながら之を創造するの大器を得ることであつて、此の大器によりて弊政の總てを更革し、以て國民の嚮ふ所を指導せしむることが焦眉の急務である。

(追記) 本論は齋藤内閣の末期に執筆せしものなることを附記す

## 附記

此の一篇は私の主宰いたして居ります大日本愛國團機關紙『赤誠』に掲げましたものを再刊に附したものでありまして拙劣なる文字蓋し識者の嘲笑を買ふに過ぎないものであることを深く愧づる次第であります。只陋巷に屏居する私の如き老書生すら現下の重大時局に直面して内外の形勢を察するとき一片報國の志抑へんとして抑へ難く爲に此の一篇となりたるもの希くば匹夫尙ほ國を思ふの衷情を諒とせられたいのであります。苟も生を斯土に亭け天孫民族としての鮮血に活きつゝある吾等は此の時局を前にして晏如たることは良心の許さざる所でありまし

て國民を擧て危機の第一線に立つ覺悟がなくてはならぬと存するのであります。熱鐵を鍛ゆるハンマーの一撃にも報國の一念が籠り、隴圃に耕す四匙の尖端にも愛國の至誠が宿つていふ言ふ眞劍味が舉國一致の氣持であらねばならぬ。然るに酒場の窓より洩るゝものは癡癡的の俗謠であり眼に映するものは青春の血に狂ふ男女の痴態であることは彼等の關心が何れにあるかを疑ひ、且つ悲まざるを得ないではありませんか、私が斯様なことを申せば老人の杞憂と一笑に附せらるゝでありませふが、事實今日の世相が輕薄に流れ淫蕩に荒みつゝありとする悲觀的の觀察は國を憂ふる識者の共に放てる嘆聲であります、蓋し當今の世相が爾く腐爛せることは極端なる個人主義思想の東遷による感化であることは之を否まれません。而も國民指導の機關である政治、宗教、教育の權威全く地に委せる結果で

あることを指摘せねばなりません、政治家や高級の官吏が其地位を利用して苞苴を貪り暴富を積み酒色に沈溺すると云ふ亡國の罪惡が到る處に演せられて一國の綱紀を紊り社會の風紀を破壊しつゝある現状は何としても看過することの出來ない國家の憂患でなくて何でありませふ、殊に重大なる危局が明年に迫れる今日吾等國民の猛省一番すべきは實に此時であらねばならぬと存じます。

私が此稿を草しつゝあるとき東郷元帥閣下薨去の號外に接し新愁の更に深く胸を打つものがあります。曩には我神國の國寶たりし乃木將軍の明治大帝に殉せらるゝありて、其一人を失ひ、今亦國民教養の生ける典型として國民渴仰の神人東郷元帥を失ひたることは邦家のため悲しむべき痛恨事である。惟ふに神の如き此の兩將軍が我國民に與へられたる精神的感化が如何に偉大に且つ切實なるもので

あつたか、其軍陣に臨むや驍勇無双の總帥であると共に一市民としての至誠と廉潔とは真に珠の如き温容の高士たらしめ兒童も其徳を慕ふたのであります。即ち神人交感の境地にありて一世の師表、國家の柱石たりし東郷元帥が此の國家多難の秋に薨去せられたと申すことは畏き天啓の吾等に下りしものではありますまいか、即ち此の機會に於て國家の柱石を奪ひ罪惡に充ちたる國民をして翻然自省せしめんとする神秘の閃きではないか、私は同胞諸君と共に思ひを茲に致したいと存じます。

私は此際特に政黨政治家諸君の爲に一言いたしたいと存じます。彼の五・一五事件の勃發を契機として諸君が既往の政弊を自覺し政治に對する覺悟を新にすべく屢々天下に宣言せられたことは洵に結構な事であつて、諸君が虚心坦懷眞に國

士の風格を存し以て國政變理の大任に精進せらるゝであろふことを期待いたしましたのでありますが、昨今に於る諸君の行藏が動もすれば、黨人根性を蟬脱する能はず區々の感情に囚はれて邦家の危機を忘れたるかの如き振舞あることは曩の宣言に對して何たる矛盾でありませうか、彼の政民兩黨聯合の政策協定會議が形式的であり微温的であつて更に一物の得る所なきは諸君の不誠意を曝露するものではないませんか、嗚呼政黨更生の日は果して何れの日ぞ、私は竊かに日暮れ道遠しの感に泣かざるを得ませぬ。

要するに昭和維新の大事業に参加すべき大和民族の資格としては神聖なる我國體に對して絶對の信仰を有すると共に、其國體と併行する皇道に對して敬虔なる認識を有するものであらねばなりません。此の信仰と認識とは臆て正義に燃ゆる

冲天の靈火となり總ての不正不義を焼き盡し、以て全人類を醇化せしめ美化せしむるのであります。斯の如くすることによりて吾等が負へる使命を果し得るのであります。尋常一様の努力を以てしては到底其成果を收むることは出来ないのであります。即ち其準備工作として内部整頓の必要を痛感するのであります。

一、強力なる内閣を出現せしめて庶政の刷新を斷行し徹底的に人心の一新を期すること

二、皇道宣布の機關を置き國民の總てに國體觀念を徹底せしむること

三、官吏採用の方法を改善し綱紀の振張を期すること

四、非日本的思想に對して嚴重なる彈壓を加へ苟くも假借せざるること

五、倨傲にして奢侈を極め奉公の大義を意とせざる富豪に對しては懲罰的重

税を課すること

六、廢兵院を設立し一般戰傷者に對する優遇の實を示すこと

## 附 言

此の一篇は大日本愛國團機關雜誌「赤誠」に掲げたるものを更に訂正修補し再刊に附したものであります。素より晦澁の文字之を江湖に頒つ資格あるものでは斷じてありませぬ、只近時に於る我世相の頽廢的なる其政治の微温的なるに寒心する所あり、即ち本書を公刊して是非を江湖に仰がんとするものであります。幸に讀者の批判を寄せらるゝあらば著者の本懷之に過ぎぬ

次第であります。

著者は其半生を政黨に委ね多年犬馬の勞に服し來つたものでありますが、往年板垣伯が率ひし自由黨時代の意氣と其後身たる政友會の今日の意氣とを比較し來りますると宵壤管ならぬ感があります。往年自由黨の主張せし所の總てが妥當なる經綸であつたとは思はれませぬが、而も其國家に許すや威武も屈する能はず富貴も淫する能はざる風格を存し、意氣に燃へつゝあつたものであつて、勢に屈し利に走ると言ふが如き女々しき進退は微塵もなかつた即ち事成れば天下と共に樂むべく事若し成らずんば、死して護國の鬼となると云ふ武士道的氣魄に終始したものであります。従つて議會の空氣は森嚴其物であり議員の人格亦玲瓏其物であつた、著者が往年の記憶を喚び起して今

の政治家を見るととき眞に隔世の感に堪へざるものがあります。往時の政治家は節義を守るに身命を以てし、今の政治家は徳義を捨つること弊履の如し、要するに日露戰役後に於る政界の墮落は刻々其度を加ふると共に國家の元氣も之に伴ふて時々凋落しつゝあるのであります。苟も志邦家に存するの士が此の國情に對して悲憤の涙をそゞぐのは素より當然であります。

滿蒙の曠野漠々として際涯なきところ我同胞の地下に眠れるもの幾万、勇魂空く祖國の天を繞りて此の國情を見るととき其感果して幾何ぞ、黒龍江畔の揚柳風なきに戦ぐは地下の英靈慨然として慟哭の聲を放つを傳ふるものではないか、吾等は此際吾等の使命の犠牲となりて屍を異郷に埋めたる勇士に酬ゆるの義を想起し、眞劍に自己を反省し以て其誤れるを匡し其怠れるを悛め



猛然として本來の使命に邁進せねばならぬ。太平洋の浪如何に高くとも、興安嶺の雪如何に深くとも、我は將に怒濤を征服するの長鯨となり、雪を掃ふの猛鷲となるべきではないか、一難を経る毎に勇氣一倍し來るは大和民族の本領である。山雨來らんとして風樓に滿るとき、決然手に唾して起つ實に是れ男兒の本懷ではないか。

今の日本は聯盟會議脱退以來孤立の状態にあるのであつて、我同胞の内には此の状態に不安を感じるものが絶無であるとは思はれない、若し我同胞中に此の卑怯ものありとせば蓋し思はざるの甚しきものである。惟ふに歐米に於る物質的文化は己に其頂上に達せる結果、生活指針の行詰りとなり煩悶を重ねつゝある現狀は吾人の眼前に展開されつゝある世界的映畫ではないか。

而も彼等が此の懊惱を醫すべく物質的勢力を以て東洋の精神的文化を征服すべく盛んに經濟的工作と武力的工作に腐心せることは著明なる事實である。吾人は此の妄動を靜觀して徐ろに其推移如何に想到するとき朗々たる凱歌身邊に起り之に和する勝利の音樂の劉曉たるを聞くのである。是れ昭和維新完成の第一歩でなくて何であらふ。

何をか日本の精華と言ふ、天地正大の氣凝つて我皇道となり赫々たる三千年の光彩を宇宙に放ち來りし夫を言ふのである。彼の白哲種族が物質的文化の創造者として勢を四方に張るとき、精神的文化の創造者たる東洋民族は沸々たる正氣を抑へて暫く其爲すに任せたのであつた、而も時の經過は物質的慾望の東遷し來るありて我臥榻を脅すに至り、茲に日本民族の蹶起となり精

神的文化の威力の如何に偉大なるかを示すべき壇場の展開を餘儀なくさるゝ事となつた。明治中葉以降に於る我動向は明かに我皇道より生れ出たる精神的文化の威力を説明して餘蘊なきものである。然り外冠斷じて憂ふるに足らず、只吾人の關心する所は國民の自覺如何にあるのみ。

今本稿を終るに臨み江湖幾多の志士が多大の芳志を寄せられたるに對し茲に恭しく感謝の意を表する次第であります。

昭和九年八月三十日印刷納本  
昭和九年九月十日發行 定價一部三十錢

小倉市鍛冶町八四

編輯兼發行人 吉田慶三郎

小倉市大門町四七

印刷人 中野長藏

小倉市大門町四七

印刷所 合資會社中野印刷所



